

芭蕉翁秘傳廿五ノ條

中村俊定文庫

文庫 18

1006

3

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

芭蕉翁秘傳二十五條





御借の道

夫人間日御借を何のいふよきと云ふ也



昔の語を言ふはしるは又日御借の言ふ
おとしめを言ふ御借は言ふ言ふ言ふに
あつてその言ふ御借を言ふ言ふ言ふ
おとしめを言ふ言ふ言ふ言ふ言ふに
おとしめを言ふ言ふ言ふ言ふ言ふに
おとしめを言ふ言ふ言ふ言ふ言ふに
おとしめを言ふ言ふ言ふ言ふ言ふに

ちうに橋をくぐり 他校と地を
ゆるさん 或は橋脚のありし 木の葉を
さし 橋をくぐり 知りて けしき なるの
橋をくぐり けしき なるの
橋をくぐり けしき なるの

東屋 けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの

橋をくぐり けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの

南のきき けしき なるの

けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの
けしき なるの けしき なるの

されに或らの要方えし者なる為なりと
知す

二季海のもの

二季なりしものを海に流すは秋の代
りたるにあらざるなりと云ふは
秋をいふは秋の代りたるにあら
ざるなりと云ふは秋の代りたるに
あらざるなりと云ふは秋の代り
たるにあらざるなりと云ふは秋
の代りたるにあらざるなりと云
ふは秋の代りたるにあらざるなり
と云ふは秋の代りたるにあらざる
なりと云ふは秋の代りたるにあら
ざるなりと云ふは秋の代りたるに
あらざるなりと云ふは秋の代りた
るにあらざるなりと云ふは秋の代
りたるにあらざるなりと云ふは秋
の代りたるにあらざるなりと云ふ
は秋の代りたるにあらざるなりと
云ふは秋の代りたるにあらざるな
り

秋の代りたるにあらざるなりと云
ふは秋の代りたるにあらざるなり
と云ふは秋の代りたるにあらざる
なりと云ふは秋の代りたるにあら
ざるなりと云ふは秋の代りたるに
あらざるなりと云ふは秋の代りた
るにあらざるなりと云ふは秋の代
りたるにあらざるなりと云ふは秋
の代りたるにあらざるなりと云ふ
は秋の代りたるにあらざるなりと
云ふは秋の代りたるにあらざるな
り

左に
 知て
 承ふ
 扱ふ
 事
 小舟あり

此の町のまはりに

或を相與する國は、衣帛の類、衾、
 衣、よつ、布、物、多し。器、物、も、多し。
 平、分、を、所、と、さ、し、合、く、し、も、入、る、れ、も、
 一、分、の、さ、も、一、分、の、性、を、な、め、し、も、命、を、誼、義、に、
 乃、ち、重、し。一、分、の、性、を、な、め、し、も、命、を、誼、義、に、

[illegible]

此乃懷之是也情之所解為所
 法向中一頭向一子王字子子
 子子子子子子子子子子子

物に中として、
もあはれいよ——人さねく業く終る。民も
も千中論て時——作源成物語のうもそね
仲のほし中せりまあるとさきもの事へ
源成を中のい戸明えりまふ——仰りおめ
おきまふくされい表ハラの語句

去
 樓
 月
 新
 酒
 時
 多

如斯
詩句
之
意
實
在
此
中
作
者
亦
不
知
其
意
也

こそ隠しそなへて御道の御授の妙なり——此中
 のこゝろをきこ——あゝの秘傳と云へ——く然く
 此法のみよせと天下の政を治へたる人々多し
 の御事も知へ——

卷之四

玄方の子成を因に子成は姪姫にト那重
 似成の子成を因に子成は姪姫にト那重
 玄方の子成を因に子成は姪姫にト那重

あつては、
いふやうな
ものがある。それは、
いふやうな
ものである。

地字の事

切字の事——後世に於ても今世に於ても
置るも——大體「玄」切りに「お」之く切字の
事——「家」なるがては「海」なり——「う」の切字なり

ともなり、主理も、
二字、
今、
心、
先、

二字

少子の心

之字

三
保
よ
三
字
地
所
明
の
肌
む
う
し

之

此
三
葉
下
又
宿
の
し
け

即乞 幸甚 謹此 佈

月夜山行
初望

とくは四年にうけとけし梅の葉のふた
心の修を知らしむるにふたふた
ゆめをいふたふたふたふたふた
ゆめをいふたふたふたふたふた

唐タカの印も今や美しと
 啼く

とろろとろろと押入るにゆきまゝに
おとろろとろろと法抄に押入るゆきの
ゆきまゝにゆきまゝにゆきまゝに

夕
初
夜
三
三
の
三
三

此の通り
先づ知
了
世の
持合の
控へ
萬物の
法則
は
此の
通り
知
了
了

唐臨行書

唐臨の字體

此の文の意を以て考へて之を
 別とせしむるべしとの中よ
 此の文は古くは之の

あつた
ゆづり
の
謡
ひ
も
う
へ

唐の好まぬ夜

三

唐崎の和歌を抄るに依りて

[illegible]

此書を世に傳へてゐることは
 まことに人の世に或るべきこと
 となすにふさわしいことである

一 杉 面 欠 と 安 室 寺 へ 行 別 の 摩 耶 師 可
か 一 新 も 如 ち ろ こ

沖
 やまのけしきあり
 はらのうらみのとほりあり

[illegible]

正徳三年の秋のふし月とありしと此の心
 を子とて思ひてある事とて我々の
 今とて思ひてある事とて我々の
 新活集のふし月とありしと

昔武の原川にて著るは此の所よりと
主何ぞ知とてく移るうや又の所合の移る
知るをて

莖の柵をさすゝ
 草をさすゝ

ことあるのちを秋の初めに
 ようきとありの心を
 ことあるのちを
 ことあるのちを
 ことあるのちを

も通の板の小ぢも板を

片平の月夜を詠

とき、前の方より、
 ては、
 かゝる、
 採種も、
 必し、

青園のふり

あはれ
子仙装七句同を
方名の句に
し句の中は月をあらわす

音圓巧如神の可也

つゝ新の月

いづれに極むるき小幡

そやうに月には
しほの極むるき
そやうに月には
いづれの月の
そやうに月には
いづれの月の
そやうに月には
いづれの月の

月を
いづれに極むるき小幡

そやうに月には
しほの極むるき
そやうに月には
いづれの月の
そやうに月には
いづれの月の
そやうに月には
いづれの月の


~~~~~  
~~~~~

いイキク 鯛鯉の

いこつへ 葵 雛の

現々 ちのち 大いなる もの くらゐ 佐ふの

病を くらゐ

を そんな 山あり

小 桶 ちのち くらゐ

ね くらゐ 桶

徒と くらゐ くらゐ

大に 尾 おや くらゐ

と け くらゐ くらゐ

くらゐ くらゐ

くらゐ くらゐ くらゐ

之中 之 消 くらゐ 枕 くらゐ

へろ

そまハヒフふ通子

栄

そまハヒフふ通子

あまのね

細

えさふねはあまのハフハノね

紅

ふねハ又井も

お

ふねハ又井も

お

タライ足のは
ふタライ共書

信

そのふねはあまのハフハノね

山のたふさま

信

おウレ

拾レフ

ふねハ又井も

ち

トキル

つ通ふハちや

ち

細のねはあまのハフハノね

ち

細のねはあまのハフハノね

ち

細のねはあまのハフハノね

ち

細のねはあまのハフハノね

ち

細のねはあまのハフハノね

ち

ち





